

氏名	杉山 夏実
ヨミガナ	スギヤマ ナツミ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第615号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 場所と人のあいだ 〈作品〉 場所と人のあいだ 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	清水 奏博
(論文第1副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	藤崎 圭一郎
(作品第1副査)	東京藝術大学	名誉教授	(美術学部)	須永 剛司
(副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	松下 計
(副査)			( )	
(副査)			( )	
(副査)			( )	
(副査)			( )	
(副査)			( )	
(副査)			( )	

(論文内容の要旨)

「場所と人のあいだ」は、場所と人間の関係にまつわる試行と思考の旅である。-どのように人間は自らの場所を定義し、構築しようとし、流動していくのか-

本論はこの問いからはじまり、日本及びドイツで採集した「人間と場所の情的つながり」に関するフィールドリサーチやインタビューを元にしたプロジェクトを具体的事例として論考を進める。制作の機会の中で出会った個個人の場所に関する具象的な物語及び事物を一連に編成しながら、今日の世界における場所性とその先についての議論へとつなげる。東京郊外の丘陵地住宅街の個人的記憶を主題にした修士研究を起点に、本博士研究では様々な話者から引き出された場所に関わる叙述をもとに都市環境と人の情動の関係性を辿った。日本からは長野県長野市/東京都六本木、ドイツからはドレスデン/デュッセルドルフ/ベルリン/ワイマールを対象地とした。異なる文化背景や社会情勢の中の事例観察を通して、人間普遍の場所にまつわる情動とその影響によって引き起こされる現象について再考する。本論の構成は次のように要約される。

前章では、循環的プロセス、行為者としての視点を通じた観察と内省、ナラティブをもとにした帰納的思考を本研究の基本的性質として定義する。

第一章は、本研究の基盤となった場所についての代表的な既往論考について。現象的地理学者のエドワード・レルフの現代の没場所性に関する批判と、イーファー・トゥアンの提示した場所に対する人間の情的繋がりを「トポフィリア」の概念について触れる。そして批判的場所の記述法の事例として杉浦康平、ギー・ドゥボールの例を挙げ、ドリーン・マッシーによる現代における流動的な場所性に関する視点について紹介する。

第二章では、場所と情動の関係について辿る。ここでは本研究を通して見出された仮説として、人間の場所に関する多様な情動的反応を三辺から成る図形に見立てて論じる。誰もが共感しやすい「郷愁」、テリトリー保護の感覚が引き起こす「反動」、更新や移動を内包する「向こうへ」という項目を仮定している。場所と人のあいだの移ろいやすい複雑性と恣意的な操作にも影響されやすい側面について、そして特定の反応

が強く出ている事例でも俯瞰的に三つの要素の関係性について考えることの重要性を指摘する。

第三章では都市を舞台にした場所と人の物語として、意図したプロジェクトを通じた場所の様相の観察を記述する。長野/六本木/ドレスデン/デュッセルドルフ/ベルリンの五つの都市で実施したプロジェクトの中で収集した場所に関するインタビューと、媒介物として用いたダイアグラムなどを通して、現代の場所性と個人の関係を紐解く。

第四章の周縁の物語では、主にワイマールでの日常生活を事例にドイツでの公共空間や住環境から観察された場所づくりを促す仕組みや、場所の記憶を記録する機関としてのアーカイブ概要を紹介する。また2019年に実施したプロジェクトをもとに、小さな場から始まり場所性を越えたものとしての美術教育運動に言及する。

第五章は、2019年度東京藝術大学博士後期課程審査展での展示「試行の痕跡、過程の露呈」の解説を通して、行為から思考をつくりだす非線形的な過程の提示を行なっている。

第六章は、個別の場所性に関する観察「場所と人のあいだ」から見えた越境性について叙述し、本論の結びおよび今度の研究における議題とする。

#### (論文審査結果の要旨)

本論文は、筆者が日本とドイツの複数の地域（長野、東京・六本木、ドレスデン、ベルリン、デュッセルドルフ、ワイマール）で行ったフィールドリサーチをもとに、人が自分の暮らす（暮らした）場所に対してどのような思いをもつかを調査し、場所にまつわる人びとの物語を筆者独自の視覚表現及び空間表現に置き換えるというアートプロジェクトの顛末を記した、極めて独創的かつ野心的な論考として高く評価できるものである。

第二章で示される「場所の情動図」は、郷愁 (Nostalgia)、反動 (Reactionary)、向こうへ (Beyond) の3つの頂点をもつ三角形で、場所に対する人びとの思いがこの三角形の中でそれぞれのケースに応じてダイナミックに形成される姿が表されている。特に、過去から連なる2つの指標（郷愁、反動）に加えて、未来へ連なる「向こうへ」という軸を加えたことで、場所の記憶がダイナミックに変容する様が浮き彫りしている。筆者は、他者の場所に対する語りを各プロジェクトのなかでそれぞれ異なる視覚表現及び空間表現に置き換えているのだが、この図が作業仮説として機能することで、そのアート表現に説得力をもたせていることは特筆に値する。

本論文でもっとも興味深い点は、ドイツでのプロジェクトにおいて筆者が日本に暮らす人びとに比べて圧倒的に多様なルーツや背景をもつ人びとに直接調査することで、第二章の「場所の情動図」を踏まえてさらに新たな場所への思いのモデルを示そうと試みている点である。漂流しホームタウンをもたない人や、移民排斥を行う人びとの思いに触れ、単純な図式化が困難なほどの複雑な様相に気づき、筆者は分断を超える流動する場所のモデルを示す。分断か、越境か。現代の世界の政治事情と同様に筆者も揺れ動く。郷愁に傾きがちな日本での調査に比べて、ドイツでのプロジェクトの論述では「向こうへ (Beyond)」へ向かう強いベクトルが描き出され、人と場所の関係性を問うことで、この世界の未来のあり方を問う。

以上のような考察から、本論文は未来に向けて動的に変容する人と場所の関係性を独自の視点から分析した論考として認めることのできるものであり、博士学位にふさわしいものとして評価する。

#### (作品審査結果の要旨)

私たち人間にとって「場所」とは何か。この問いから場所の意味を探ること、それが杉山夏実氏の探究のテーマである。氏はそのテーマを「場所と人の関係」あるいは「あいだ」とする。場所の意味は、場所と人の「あいだ」にあるという主張がこの探究の基底をなしている。氏の立てた問いには2つの契機がある。ひとつは東京郊外にある氏の実家で「わたしの場所に戻らないといけない」と語る認知症の祖母と氏の対話である。もうひとつはエドワード・レルフの「場所の現象学」そしてイーファー・トゥアンの「トポフィリア（場所愛）」との出会いである。着目する「場所」と「人間」は、氏が大学と大学院で受けた芸術を背景と

する環境デザイン領域の本質的なモチーフである。その意味でこのテーマは芸術デザイン分野の本質的な問題と言える。

氏の「作品」はまさに「art work」である。つまり「芸術表現が駆動する仕事（探究）」としてこの博士研究は展開されている。その意味で、「作品と論文」に分かれたものではなく、博士論文もふくめ氏の探究全体が「作品」だととらえることができる。この「仕事」とそこで創作したものを「試行の痕跡」とし、「古典的な意味での「作品」としての自立した価値はない」とする氏の言葉にそのことが示されている。

東京藝大美術館の博士展に展示されたのは5つの「作品（試行の痕跡）」である。①「情動図」と名付けられた映像、②「境界について」と名付けられたビジュアル、③「場所と人の物語」という5都市（長野、六本木、ドレスデン、デュッセルドルフ、ベルリン）を舞台にした探究についての論述、④展開したさまざまな試行の痕跡としての「周縁の物語及び物証」という15の「物証」を並べた展示物、そして⑤博士論文である。これら作品群のなかで博士論文を、ほか4つの「作品」の「メタ作品」と位置付けることもできると思う。現実のその場所に立ちそこに生きる人間と対話し表現を繰り返すという、氏の体験的探究の連なりとしての4作品を俯瞰する論述として編みあげた博士論文を「答え」とはしないという意味である。

この博士研究方法の特徴は、理念から解答を導くのではなく、自己の体験のなかに応えを感じるとするという探究の方略にある。すなわち、自身が現場に立ち、そこにいる人びとと対話し、その体験から表現を創作し、その創作から再び対話を創生する。その連なりのなかに応えを見いだすという展開方法である。それは、今日、新たな学術の試みとして議論されている「一人称研究（あるいは二人称研究）」とも呼応している。

この研究の意義のひとつは、もちろん環境デザイン研究としての「場所」の意味の探究にある。氏の論述の中心はそこにある。しかしそこにとどまらず、その探究を展開する知、すなわち「表現が駆動する探究」を支える知性、言い換えれば芸術デザインの「知」を探るアプローチを開拓しようとする点にもこの研究の大きな意義を見出すことができる。それは「在るもの being」として作品を論じることから、作品を創生するプロセス、つまり「成ること becoming」の知に着目しそれを論じてみたいというこの博士研究の企図にある。このことは、新たな複合的学術のひとつとして今日求められている「デザイン学」の構築に必ずやつながると考える。その意味で、この博士研究の展開全体をもう一度俯瞰し、そこにある探究の知を省察することから表現の知とは何かを論じてみるのが氏の次なる課題として期待される。

#### （総合審査結果の要旨）

杉山夏実さんの博士作品及び論文は、東京藝大・修士修了作品「About my topos」後の「場所の研究の変遷」を示すようなものとなった。修士時代は場所を自身の故郷の街に限定し、そこへの愛着がどこから生じているのかを探るものであったが、全く違う地、留学先のドイツでの体験とそこでのサーベイ、フィールドワークが加わることにより、とても興味深いものに深化した。交換留学で始まったドイツへの留学期間は4年余りに及び、その間の調査研究及び制作は膨大なものとなった。博士展での作品発表においては、思考過程の中で生まれたそれら数多くの作品を精度を上げて展示する方法もあったのだが、本人がそれを作品とすることをよしとはせず、あくまで思考過程そのままを展示するという方法を取った為、少し分かりにくい作品となった面はあったが、じっくりと見ていけばその内容の奥深さが分かるものであった。

杉山さんにとってのドイツ（ワイマール・パウハウス大学）留学は、それまでの日本のみをフィールドとしていた者にとっては、特に強烈なインパクトを与えるものであったと思われる。ドイツという自分の故郷（出自）に関する意識の複雑な国での体験は、正にグローバル社会の現代の実態を身を以て体験したことであり、本研究にとって貴重なものであったことが窺い知れる。

作品としては日独の5都市（長野、東京・六本木、ドレスデン、デュッセルドルフ、ベルリン）における都市探求の試みの記録である。それはまた人が描く都市像の多様さを示すものでもあり、それぞれの場所での調査方法、表現方法の多様性を示すと同時に、人と場所との関係の多様性を改めて示すものとなった。作品は思考プロセスをそのまま示したもので、この研究にとっては調査対象や調査方法の違いによって全く違

う作品が生まれるであろうことも示唆されている。個々の体験を個々の作品として精度を上げて完成させるのではなく、作品全体として「多様であること」を示す作品とした意図であろう。

論文はそれぞれの都市での調査、ヒアリング、制作、展示などを通して得られたものを分析したもので、そこではそれぞれの場所に対する人の様々な思いが如何に多様で、いかに強いものであるかが強烈に訴えかけてくる。ドイツの故郷を示す「Heimat」という言葉に対するドイツ人の反応にも、この国の歴史が影を落とし、人の場所意識に政治が与える影響が強くあることも描写されている。そのようないくつもの事例を踏まえて、氏は2つの図「場所の情動図」と「境界について」を示す。「場所の情動図」では場所イメージが3つの要素の相関によって、揺れ動くように存在していることを論じ、「境界について」はグローバル化した現代の場所意識の在り方への示唆ともなっている。

この作品及び論文は様々な場所のリアリティが感じられるものになっていると同時に、今後のこの分野での研究の重要さが示されたとてもインパクトのある論文として高く評価された。よって本研究を博士学位にふさわしいものと認めるものである。